

# 『佛說大安般守意經』における 「本文」と「註」の解明(三) ——「五力」から「四解依」まで\*

釋果暉

法鼓佛教學院助理教授

## 摘要

1999年に日本・大阪府・天野山にて、いわゆる「新発見の安世高訳『安般守意經』金剛寺本」(=『新出安般經』)が発見されてから10年が経ち、その内容そして大正蔵 T602『佛說大安般守意經』とのかかわりがようやく解明してきた。

筆者は、第3期および第5期の『法鼓仏学学報』において『佛說大安般守意經』『新出安般經』という両經における「安般の六事」を中核として、順番に「数」「随」「止」「觀」「還」、そして「淨」の「四意止」「四意斷」「四神足」「五根」のそれぞれの段落の内容を比較し、そして「本文」と「註」との箇所を判別した。つまり、『佛說大安般守意經』に対して『新出安般經』と対応する文、用語、あるいは意味の同じ箇所を原始的な「本文」と定義し、それらの「本文」に対する解釈を「註」と見分ける。

本論では「淨」の最後の部分『三十七品經』における「五力」、「七覺意(七菩提分)」、「八行(八正道)」、そして「止觀」「四諦」「四解依(四無碍辯)」の部分を総括する。このような比較をすることによって『佛說大安般守意經』中の「本文」と「註」との箇所を分別する。

---

\* 收稿日期: 2009/02/28, 通過審核日期: 2009/07/08。

研究の結果、『佛說大安般守意經』『新出安般經』と緊密な関わりを持つのが、『修行道地經』の「数息品」および『陰持入經』である。例えば、『佛說大安般守意經』は、『新出安般經』と「数息品」とともに「八正道」についての特殊的な定義をもつ。このような定義は、大変まれである。さらに両経とも「日出作四事」という比喩を有するが、「数息品」中では現れていない。しかしながら、『陰持入經』中では見出せる。という事は、この比喩は『陰持入經』から引用し編成したものである。最後に『新出安般經』中では、「四依解（四無碍辯）」の完全な段落を持つが、『佛說大安般守意經』中では、断片的なものになっている。しかし厳密に研究することによって四無碍辯のことを解釈している事と判明した。

## 【目次】

- 一、「三十七品經」の「五力」
- 二、「三十七品經」の「七覺意」
- 三、「三十七品經」の「八行」
- 四、「止觀・四諦」
- 五、「四解依」
  - (一) 南・北伝における「四無碍解」に関して
  - (二) 『新出安般經』における「四解依」に属する学派と内容に関して
  - (三) 〔Ⅲ段〕の「若陰・若行・若入」について
  - (四) 〔Ⅳ段〕における慧慧知・慧慧成・慧慧解について
  - (五) 『佛說大安般守意經』における「四解依」文について
  - (六) 「法正」の意味について
  - (七) 『佛說大安般守意經』の〔B段〕の「本起・本著意」の意味
  - (八) 『佛說大安般守意經』の〔E段〕の内容について
  - (九) 『佛說大安般守意經』の〔D段〕の内容について
- 六、結論

關鍵詞：安世高、經與注、止觀、四諦、四解依

## 一、「三十七品經」の「五力」

### 五力 pañca balāni

『佛說大安般守意經』における五力の文は次のごとくである。

從諦，㊸信不復疑，是名信力，棄貪行道。從諦，㊹自精進，惡意不能敗精進，是名進力，惡意欲起當即時滅。從諦，㊺是意無有能壞意，是名念力，内外觀。從諦，㊻以定，惡意不能壞善意，是名定力，念四禪。從諦㊼得點，惡意不能壞點意，是名點力，念出入盡復生。是名為五力也。<sup>1</sup>

文中の「棄貪行道。……惡意欲起當即時滅。……内外觀。……念四禪。……念出入盡復生。」は安世高本人が各道品に加えた解釈であるとみられる。それらの解釈の箇所を除き、次の文はオリジナルテキスト文であると考えられる。

從諦，信不復疑，是名信力。……從諦，自精進，惡意不能敗精進，是名進力。……從諦，是意無有能壞意，是名念力。……從諦，以定，惡意不能壞善意，是名定力。……從諦得點，惡意不能壞點意，是名點力。……是名為五力也。<sup>2</sup>

『新出安般經』における五力の文は次のごとくである。

『佛說大安般守意經』の「五力」の㊸㊹㊺には「惡意」が四回に及んで使用されていることからみると、『新出安般經』の「五力」の③④の「感意」が「惡意」の誤写であるのを指摘したい。

<sup>1</sup> CBETA, T15, no. 602, p. 170c1-6.

<sup>2</sup> 同上註。

彼如有諦，①信，不信不能得壞信，是名為信力。彼如有諦，②精進，不精進不能得壞精進，是名為精進力。彼如有諦，③念意，感<sup>3</sup>（惡）意不能得壞念意，是名為念力。彼如有諦，④定意，感<sup>4</sup>（惡）意不能得壞定意，是名為定力。彼如有諦，⑤智慧<sup>5</sup>，不慧不能得壞智慧<sup>6</sup>，是名為慧<sup>7</sup>力。屬是故根，不能得壞故力，如是五力，是時行俱行。<sup>8</sup>

「数息品」における五力は次のごとくである。

其信温和，是謂①信力。②精進力，③意力，④寂意力，⑤智慧力，亦復如是，成就五力。<sup>9</sup>

「温和」について「数息品」は次のように述べている。

何故求温和？欲致頂法。<sup>10</sup>

唯念佛，法，聖眾之德。苦，習<sup>11</sup>，盡，道四諦之義，便獲欣<sup>12</sup>悅，是謂温和。<sup>13</sup>

---

3 感=咸㊦。

4 感=咸㊦。

5 慧=惠㊦。

6 慧=惠㊦。

7 慧=惠㊦。

8 ㊦TEXT, 192ff-200ff.

9 CBETA, T15, no. 606, p. 218a28-b1.

10 CBETA, T15, no. 606, p. 217a6-7.

11 習=集\*，CBETA, T15, no. 606, p. 217b5。

12 欣=忻，CBETA, T15, no. 606, p. 217b5。

13 CBETA, T15, no. 606, p. 217b4-5.

語義の厳密さに焦点をしばると、「数息品」における「温和」の語義はそれほどではないともいえよう。本来なら四善根の「煖法」を指すものである。五の（一）<sup>14</sup> で論じたように、「煖・頂・忍」は「下信・中信・上信」との対応関係を持っているし、「数息品」の文中に記している「煖法」をはじめ、信力までの修習のプロセス<sup>15</sup> は、大抵「信」と関わっていると考えられる。

修習のプロセス	煖	頂	忍	見道	四神足	五根	五力
三宝・四諦に対する信	下信	中信	上信	無有狐疑	信	信根	信力

『佛説大安般守意經』『新出安般經』『数息品』の三者の間にある対応関係は下表の述べる如くである。「数息品」の「五力」は簡略な文であるのに対して、『佛説大安般守意經』『新出安般經』は似つかわしい文体で対応している。

『佛説大安般守意經』	『新出安般經』	「数息品」
㉔信，不復疑，是名 <u>信力</u>	①信，不信不能得壞信，是名爲 <u>信力</u>	❶信力
㉕自精進，惡意不能敗精進，是名 <u>進力</u>	②精進，不精進不能得壞精進，是名爲 <u>精進力</u>	❷精進力
㉖是意無有能壞意，是名 <u>念力</u>	③念意，感（惡）意不能得壞念意，是名爲 <u>念力</u>	❸意力
㉗以定，惡意不能壞善意，是名 <u>定力</u>	④定意，感（惡）意不能得壞定意，是名爲 <u>定力</u>	❹寂意力
㉘得黠，惡意不能壞黠意，是名 <u>黠力</u>	⑤智慧，不慧不能得壞智慧，是名爲 <u>慧力</u>	❺智慧力

<sup>14</sup> 『佛説大安般守意經』における「本文」と「註」の解明，『法鼓佛學學報』3，pp. 45-49。

<sup>15</sup> CBETA, T15, no. 606, pp. 217b4-218a29.

## 小結

『佛說大安般守意經』の「從諦，㉑信不復疑，是名信力」「從諦，㉒自精進，惡意不能敗精進，是名進力」「從諦，㉓是意無有能壞意，是名念力」「從諦，㉔以定，惡意不能壞善意，是名定力」「從諦㉕得黠，惡意不能壞黠意，是名黠力」は、本文の箇所であり、そしてそれらの本文の箇所に対して、「棄貪行道」「惡意欲起當即時滅」「内外觀」「念四禪」「念出入尽復生」は、註の箇所である。

『佛說大安般守意經』における「五力」に関して、各解釈のところを取り外すと、主な文は殆ど『新出安般經』の「五力」の文と対応している。「数息品」の「五力」の文は簡略な記述でありながらも、「五力」という名称が整然と揃っている。

## 二、「三十七品經」の「七覺意」

### 七覺意 *satta bojjhaṅgā*

『佛說大安般守意經』における七覺意の文は次のごとくである。

- ㉑從諦，念諦，是名為覺意，得道意。㉒從諦，觀諦，是名（法名）法識覺意，得生死意。㉓從諦，身意持，是名力覺意，持道不失為力。㉔從諦，足喜諦，是名愛覺意，貪道法，行道行道法<sup>16</sup>。㉕從諦，意得休息，是名息意覺<sup>17</sup>，已息安隱。㉖從諦，一念意，

16 行道法＝法行道㉑㉒㉓㉔。

17 息意覺＝意覺意㉑㉒㉓。

是名定覺意，自<sup>18</sup>知意以安定。㉔從諦，自在意，在所行<sup>19</sup>從觀，是名守意覺<sup>20</sup>，從四諦觀意。是名為七覺意也。<sup>21</sup>

上記した引用文の㉔～㉙の「得道意。……得生死意。……持道不失為力。……貪道法(行道)行道法。……已息安隱。……從四諦觀意。」の文は、安世高の各道品に付加する解釈である。

㉔の「覺意」を「念覺意」と見なされるのは、『陰持入經』に「念覺意」という訳があるから。原語は *satisambojjhaṅgo* である。

㉕の「名法名法」は重複しているため、「名法」に還元すべきとされる。

㉖の「息意覺」<sup>22</sup> は「息覺意」と同義語である。㉙の「守意覺」は「守覺意」から生ずる変化形である。

『佛說大安般守意經』に上述の七覺意の文(㉔～㉙)を解釈する文も納められている。その内容は下記のとおりである。

㊦問：何等為從諦身意持？報謂：身持七戒，意持三戒，是為身意持也。㊧從諦意得休息，從四諦意因緣休，休者為止，息為思，得道為受思<sup>23</sup>也。㊨貪樂道法，當行道，為愛覺意。㊩持道不失，為力覺意。㊪已得十息，身安隱，為息覺意。㊫自知已安，為定覺意。㊬身意持，<sup>24</sup>意不走為持。㊭從諦自在意，在<sup>25</sup>所行，謂得

18 自=息(𑖀𑖄𑖅)。

19 行=從(𑖀𑖄)。

20 意覺=覺意(𑖀𑖄𑖅)。

21 CBETA, T15, no. 602, p. 170c6-14.

22 ㉖の「息意覺」は、宋・元・明および宋磧砂藏、明南藏・嘉興藏が「意覺意」と校訂した。確かに、『長阿含十報法經』(CBETA, T1, no. 13, p. 236b11)にも「意覺意」の語があつた。しかし、この「意覺意」は、七覺意の一番目の「念覺意」と対応する。㉖の「息意覺」は、七覺意の一番目でなく、五番目である。

23 思=恩(𑖀𑖄)。

24 意持=持意(𑖀𑖄𑖅)。

25 在+(意在)(𑖀𑖄𑖅)。

四諦。亦可念四意止，亦可四意斷，亦可四神足，亦可五根五力七覺意八行，是為自在意，在所行。㉔從諦觀者，為<sup>26</sup>三十七品經要，㉕是為守意覺者，謂諦<sup>27</sup>不復受罪也。<sup>28</sup>

「㉑問：何等為從諦身意持？報謂：身持七戒，意持三戒，是為身意持也。」、「㉗身意持，意不走為持。」、「㉘持道不失，為力覺意。」は、㉑の「從諦身意持，是名力覺意，持道不失為力。」に対する解釈である。

「㉑從諦，意得休息。從四諦，意因緣休。休者為止、息為思，得道為受思也。」と「㉕已得十息，身安隱，為息覺意。」は㉑の「從諦，意得休息。是名息覺意，已息安隱。」に対する解釈である。

「㉓貪樂道法，當行道，為愛覺意。」は㉑の「從諦，足喜諦，是名愛覺意，貪道法行道（行道法）」に対する解釈である。

「㉖自知已安，為定覺意。」は㉑の「從諦，一念意，是名定覺意。」に対する解釈である。

「㉘從諦，自在，意在所行。謂：得四諦，亦可念四意止，亦可四意斷，亦可四神足，亦可五根五力七覺意八行，是為自在意，在所行。」、「㉔從諦觀者，為三十七品經要。」、「㉕是為守意覺者，謂諦不復受罪也。」は㉑の「從諦，自在，意在所行，從觀，是名守意覺，從四諦觀意。」に対する解釈である。

本文とみなす㉘の「從諦自在意在所行」、㉔の「從諦觀者」、㉕の「是為守意覺者」は、㉑の「從諦自在意在所行，從（諦）觀，是名守意覺。」と対照してみたら、配列のことだけでなく、用語まで殆ど対置している。

いわば、㉑～㉕は「七覺意」の㉑㉒㉓㉔㉕に対する解釈文に相違ない。

つまり、註と見られる「得道意。……得生死意。……持道不失為力。……貪道法（行道）行道法。…已息安隱。……自知意以安定……從四諦觀意。」との部分を除いて、「㉑從諦念諦，是名為念覺意。……㉒從諦觀

26 為+（觀）㉑㉒㉓。

27 （覺）+諦㉑㉒㉓。

28 CBETA, T15, no. 602, p. 172b4-14.

諦，是名法識覺意。……㉔從諦身意持，是名力覺意。……㉕從諦足喜諦，是名愛覺意。……㉖從諦意得休息，是名息意覺，……㉗從諦一念意，是名定覺意。㉘從諦自在意在所行從觀，是名守意覺。……是名為七覺意也。」の文は、オリジナルテキストとして認められる。その根拠は、すでに四の五根の節で論究したとおりである。

㉔～㉘の「七覺意」に対する解釈文には、安世高の特有の用語である「何等為」<sup>29</sup> 『三十七品經』<sup>30</sup> も見られるため、この文は安世高訳であると考えられている。

『新出安般經』における七覺意の文は次のごとくである。

彼如有諦，①念不忘，是為念覺種意。彼如有諦，②觀，是名擇<sup>31</sup>法覺種意。彼如有諦，③身行亦所念得攝<sup>32</sup>，是名為精進覺種意。彼如有諦，④從諦足喜，是名為喜覺種意。彼如有諦，⑤身亦然已念止，是為止覺種意。彼如有諦，⑥一向念，是名為定<sup>33</sup>覺種意。彼如有諦，⑦意隨願得觀，是名為觀覺種意。如是七覺種意，是<sup>34</sup>時行俱行。<sup>35</sup>

「數息品」における七覺意は次のごとくである。

<sup>29</sup> 他の訳経者らの訳経にも「何等為」の語があるが、安世高の複数の訳経中には多く見られ、したがって「何等為」は安世高の訳語と見なすべきである。

<sup>30</sup> 支婁迦讖訳の『仏説遺日摩尼宝經』(CBETA, T12, no. 350)に一箇所、支謙訳の『惟日雜難經』(CBETA, T17, no. 760)二箇所の『三十七品經』の語が見られるが、安世高の訳語を援用していると考えられる。

<sup>31</sup> 擇=釋㉕。

<sup>32</sup> [攝]—㉖。

<sup>33</sup> [定]—㉗。

<sup>34</sup> [是]—㉘。

<sup>35</sup> ㉕TEXT, p. 192 (=写本, p. 214), 201ff-209ff。

①能及諸法，則心覺意。②分別諸法，是謂精<sup>36</sup>求諸法覺意。③身心堅固，是謂精進覺意。④心懷喜踊，得如所欲，是謂忻<sup>37</sup>悅覺意。⑤身意相依<sup>38</sup>，信柔不亂，是謂信覺意。⑥其心一寂，是謂<sup>39</sup>定覺意。⑦其心見<sup>40</sup>滅婬怒癡垢，所志如願，是護覺意。以是之故七覺意成。<sup>41</sup>

『佛說大安般守意經』に『新出安般經』の文と重なっているところが多い。

下表に『佛說大安般守意經』『新出安般經』「数息品」における「七覺意」、および『新出安般經』「数息品」の両經にある対応関係についてまとめてみたい。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』	「数息品」
㊸念諦，是名為 <u>念覺意</u>	①念不忘，是為 <u>念覺種意</u>	①能及諸法，則心覺意
㊹觀諦，是名 <u>法識覺意</u>	②觀，是名 <u>擇法覺種意</u>	②分別諸法，是謂精求諸法覺意
㊺身意持，是名 <u>力覺意</u>	③身行亦所念得攝，是名為 <u>精進覺種意</u>	③身心堅固，是謂精進覺意
㊻從諦足喜諦，是名 <u>愛覺意</u>	④（從諦）足喜，是名為 <u>喜覺種意</u>	④心懷喜踊得如所欲，是謂忻悅覺意
㊼意得休息，是名 <u>息意覺</u>	⑤身亦然已念止，是為 <u>止覺種意</u>	⑤身意相依，信柔不亂，是謂信覺意
①一念意，是名 <u>定覺意</u>	⑥一向念，是名為 <u>定覺種意</u>	⑥其心一寂，是謂定覺意
㊽自在意，在所行從觀，是名 <u>守意覺</u>	⑦意隨願得觀，是名為 <u>觀覺種意</u>	⑦其心見滅婬怒癡垢，所志如願，是護覺意

36 精=擇㊸。

37 忻=欣㊹。

38 相依=根信㊺。

39 〔謂〕—㊼。

40 見=是㊽。

41 CBETA, T15, no. 606, p. 218b1-6.

『佛説大安般守意經』の「～覺意」の訳語に対して、『新出安般經』では「～覺種意」と訳される。「念覺種意」の用語は、『陰持入經註』<sup>42</sup>の注釈文にも見られるが、安世高の訳經には「種意」<sup>43</sup>の語が全く見当たらない。

というのは、本来なら『新出安般經』のように「種意」と訳されるはずであるが、後日になって「意」に簡略されたと考えられている。

「数息品」の七覺意は『佛説大安般守意經』『新出安般經』とほぼ対応している。対応しているものは、「①心覺意，②精（擇）求諸法覺意，③精進覺意，④忻（欣）悅覺意，⑤信覺意，調⑥定覺意，⑦護覺意。」である。

『新出安般經』に出た七覺意の五番目の「止覺種意」は、『佛説大安般守意經』の㊸息意覺（息覺意）と対応している。

『佛説大安般守意經』に出た七覺意の七番目の「守意覺（守覺意）」、すなわち『新出安般經』の「觀覺種意」、又は「数息品」の「護覺意」とされている。『陰持入經』になると、「数息品」のように「護覺意」に解釈されている。

それらの原語はともに *upekkhāsambojjhaṅgo* からきたのである。尚も、同じく安世高の訳した『長阿含十法報經』に「護覺意」とも訳されているので、竺法護の七覺意の用語は殆ど安世高の訳語から引用したものであると判明できる。いわば、「数息品」の「護覺意」は安世高の訳語から引用した用語であると考えられている。

PSSB への考察により、*upekkhā* の用語は、「護覺意」*upekkhāsambojjhaṅgo* のほか、以下の四つの用例も見られるために、安世高は PSSB の *upekkhā* を「護觀」「觀」「護」の三つの用語に訳したように思われる。

<sup>42</sup> 「復念進\*盡道原，謂之復念。安般曰：念覺種意，是之謂。」CBETA, T33, no. 1694, p. 17b19-20。

<sup>43</sup> 『道地經』では二箇所の「五種意」の用語が見られる（CBETA, T15, no. 607, p. 231c9, 232a9）。この「五種意」は、『修行道地經』の「五陰」の語に当たる。

cittaṃ nānusandhati na sandhati na saṅṭhahati, upekkhā vā paṭikkūlatā  
vā saṅṭhahati, ayamassā nissando.<sup>44</sup>

為意不墮不受，從若干思不受止，護觀思惡得止，是名為非常想。<sup>45</sup>

cittaṃ nānusandhati na sandhati na saṅṭhahati, upekkhā va paṭikkūlatā  
vā saṅṭhahati, ayamassā nissando.<sup>46</sup>

為意不受不墮，相牽不墮，不念若干意，護觀為已，惡為得止，從  
是思望致是要。<sup>47</sup>

cittaṃ nānusandhati na sandhati mamānkāro na saṅṭhahati, upekkhā  
vā paṭikkūlatā va saṅṭhahati, ayamassā nissando.<sup>48</sup>

為是為意不受，捨若干態，不受，為觀，穢惡得止，是為從是要  
致。<sup>49</sup>

subhanimitte cittaṃ nānusandhati na sandhati na saṅṭhahati,  
upekkhā vā paṭikkūlatā vā saṅṭhahati ayamassā nissando.<sup>50</sup>

令世間五樂意却，捨意，不牽不受，不復墮若干念，以得護，為惡  
得跬，是為從是要致。<sup>51</sup>

『長阿含十法報經』、対応するパーリ『長部經典』のによると、安世高は upekkhā を「護」「觀」の二つの用語に訳したと断言できる。

44 Peṭakopadesa, p. 126, 9ff-10ff.

45 CBETA, T15, no. 603, p. 176c21-23.

46 Peṭakopadesa, p. 126, 16ff-18ff.

47 CBETA, T15, no. 603, pp. 176c26-177a1.

48 Peṭakopadesa, p. 126, 24ff-26ff.

49 CBETA, T15, no. 603, p. 177a5-7.

50 Peṭakopadesa, p. 127, 5ff-6ff.

51 CBETA, T15, no. 603, p. 177a10-12.

Katame satta dhammā bhāvetabbā? Satta sambojjhaṅgā, sati-sambojjhaṅgo, dhamma-vicaya-sambojjhaṅgo, vīriya-sambojjhaṅgo, pīti-sambojjhaṅgo, passaddhi-sambojjhaṅgo, samādhi-sambojjhaṅgo, upekkhā-sambojjhaṅgo. Ime satta dhammā bhāvetabbā. <sup>52</sup>

第二七法：可行，七覺意。一為意覺意，二為分別法覺意，三為精進覺意，四為可覺意，五為猗覺意，六為定覺意，七為護覺意。<sup>53</sup>

Idha pan'āvuso, bhikkhu evaṃ vadeyya-'Upekkhā hi kho me cetovimutti bhāvitā ... pe ... Atha ca pana me rāgo cittaṃ pariyādāya tiṭṭhatī'ti.' So-'Mā h'evaṃ ti''ssa vacaniyo 'Mā'yasmā evaṃ avaca ... pe ... Nissaraṇaṃ h'etaṃ, āvuso rāgassa, yadidaṃ upekkhā cetovimuttīti.<sup>54</sup>

四為若學者言：我有觀定意，已行已作已有，但愛欲瞋恚未除。可報言：莫說是。何以故？已有觀定意，便無有愛欲瞋恚。<sup>55</sup>

上述した二つの漢訳の例を検証してみたら、仏陀耶舎共竺仏念の訳した『長阿含十法報經』の同本異訳たる『長阿含十上經』では、upekkhā は「捨」と訳すると考えられている。

云何七修法？謂：七覺意。於是，比丘修念覺意，依無欲、依寂滅、依遠離。修法、修精進、修喜、修猗、修定、修捨。依無欲、依寂滅、依遠離。<sup>56</sup>

<sup>52</sup> DNiii, 34, Dasuttara-Suttanta, p. 282, 7ff-11ff.

<sup>53</sup> CBETA, T1, no. 13, p. 236b11-13.

<sup>54</sup> DNiii, 33, Saṅgītisutta, p. 249, 4ff-15ff.

<sup>55</sup> CBETA, T1, no. 13, p. 236a18-20.

<sup>56</sup> CBETA, T1, no. 1, p. 54b16-19.

生憂惱心，行捨解脫。<sup>57</sup>

同じく安世高訳の『一切流攝守因經』と、対応するパーリ『中部經典』の Sabbāsava- Suttanta の文を見合わせてみると、安世高は upekkhā を「觀却」に翻訳したことがわかる。「觀却」の語は最も「捨」に近い訳語であると認められる。

Katame ca, bhikkhave, āsavā bhāvanā pahātabbā: Idha, bhikkhave, bhikkhu paṭisaṅkhā yoniso satisambojjhaṅgaṃ bhāveti vivekanissitaṃ virāganissitaṃ nirodhanissitaṃ vossaggapariṇāmiṃ; paṭisaṅkhā yoniso dhammavicayasambojjhaṅgaṃ bhāveti-pe-vīriyasambojjhaṅgaṃ bhāveti-pīṭisambojjhaṅgaṃ bhāveti-passaddhisambojjhaṅgaṃ bhāveti-samādhisambojjhaṅgaṃ bhāveti... upekkhāsambojjhaṅgaṃ bhāveti vivekanissitaṃ virāganissitaṃ nirodhanissitaṃ vossaggapariṇāmiṃ. <sup>58</sup>

何等為比丘流，從增行斷？是聞諸比丘意，比丘意覺有增念行，獨坐止，却猗離惡轉法。分別覺亦如是，精進覺亦如是，喜覺亦如是，猗覺亦如是，定覺亦如是，觀却覺行亦如是。<sup>59</sup>

同様に瞿曇僧伽提婆の訳した『一切流攝守因經』の同本異訳たる『中阿含漏尽經』を調べてみると、upekkhā は「捨」と訳されたこともわかる。

<sup>57</sup> CBETA, T1, no. 1, p. 54b7.

<sup>58</sup> MNi, p. 11, 21ff-29ff.

<sup>59</sup> CBETA, T1, no. 31, p. 814a19-22.

云何有漏，從思惟斷耶？比丘，思惟初念覺支，依離、依無欲、依於滅盡，起至出要，法精進喜息定，思惟第七捨覺支，依離依無欲依於滅盡，趣至出要。<sup>60</sup>

つまり、安世高が upekkhā を「觀却」と訳したという前例はあるため、瞿曇僧伽提婆の upekkhā に対する理解は間違っていないと考えられている。ところが、いつか「觀却」の「却」が脱落し、「觀」へと定着しつつあり、つい「護觀」「護」「守」などの訳語に変わってしまった。

## 小結

『佛說大安般守意經』の「㉑從諦念諦，是名為念覺意。」「㉒從諦觀諦，是名法識覺意。」「㉓從諦身意持，是名力覺意。」「㉔從諦足喜諦，是名愛覺意。」「㉕從諦意得休息，是名息意覺。」「㉖從諦一念意，是名定覺意」「㉗從諦自在意在所行從觀，是名守意覺。」は、本文の箇所である。そしてそれらの本文の箇所に対して、「得道意。……得生死意。……持道不失為力。……貪道法（行道）行道法。……已息安隱。……自知意以安定……從四諦觀意。」は、註の箇所である。

『佛說大安般守意經』の七覺意は『新出安般經』の七覺意と類似して、しかも、「数息品」の七覺意ともほぼ対応している。

『佛說大安般守意經』において、(T15, p. 172b4-14) の「七覺意」に関連する記述は、(T15, p.170c6-14) の「七覺意」を解釈する文である上で、(T15, p. 170c6-14) は、「七覺意」のオリジナルに違いない。

---

<sup>60</sup> CBETA, T1, no. 26, p. 432c16-19.

### 三、「三十七品經」の「八行」

#### 八行 *aṭṭhaṅgiko maggo*

『佛說大安般守意經』における「八行」の文は次のごとくである。

㉑從諦，守諦，是名直（見），信道。㉒從諦，直從行諦，是為直從行，念道。㉓從諦身意持，是名直治法，不欲墮四惡<sup>61</sup>者，謂四顛倒。㉔從諦念諦，是名直意，不亂意。㉕從諦一心意，是名直定，為一心。上頭為三法，意行，俱行以聲身心，如是<sup>62</sup>佛弟子八行，是名四禪，為四意斷也。第一行為直念，屬心，常念道。第二行為直語，屬口，斷四意。第三行為直觀，屬身，觀身內外<sup>63</sup>。第四行為直見，信道。第五行為直行，不隨<sup>64</sup>四惡，謂四顛倒。第六行為直治，斷餘意。第七行為直<sup>65</sup>不墮貪欲。第八行為直定，正心。是為八行，佛，辟支佛，阿羅漢所不行也。第一行為直念。何等為直念？謂：不念萬物，意不墮是中，是為直念。念萬物，意墮中，為不直念也。<sup>66</sup>

「八行」の㉑番目の「是名直信道」の「直」と「信道」との間には「見」の字が脱落していると考えられる。というのは、同經の他の文<sup>67</sup>には「直見」の語が出ているわけである。

「㉑從諦，守諦，是名直（見）。……㉒從諦，直從行諦，是為直從

61 惡+（四惡）㊦㊧㊨㊩。

62 如是=猶如㊦㊧㊨。

63 外+（八）㊦㊧㊨㊩。

64 隨=墮㊦㊧㊨。

65 直+（意）㊦㊧㊨㊩。

66 CBETA, T15, no. 602, p. 170c14-27.

67 「數息亦墮直見，用諦觀故為直見，亦墮直行，用向道故為直行。」CBETA, T15, no. 602, p. 170b10-11。

行。……㉔從諦，身意持，是名直治法。……㉕從諦，念諦，是名直意。……  
 ㉖從諦，一心意，是名直定。……」はオリジナルテキストの文であり、「信  
 道。……念道。……不欲墮四惡。四惡者謂四顛倒。……不亂意。……為一  
 心。」は後に加えられた解釈である。

『佛説大安般守意經』『新出安般經』『数息品』とにおける「八行」の主旨は、ほぼ対応している。

『佛説大安般守意經』	『新出安般經』	「数息品」
㉔守諦，是名直見	①觀，是名為直見	㊦設使別觀諸法之義，是謂正見
㉕直從行諦，是為直從行	②至誠計，是名為直行正計	㊦諸所思惟無邪之願，是為正念
㉖身意持，是名直治法	③直身亦念攝制，是名為直方便治	㊦身意堅固，是為直方便
㉗念諦，是名直意	④直意，生念不斷，是名為直正念意	㊦心向經義，是為正意
㉘一心意，是名直定	⑤直行一向念，是名為直正定	㊦其心專一，是為直正定

上述の「八行 aṭṭhaṅgiko maggo」の各解釈の最後の文は互いに対応している。

文の全体の意味をみると、①直見（正見）②直從行（正思惟）③直治法（正精進）④直意（正念）⑤直定（正定）という五つの行を示している一方、身・口・意の三つの行（直身・直口・直意）も含めているように思われる。五つの行に身・口・意という三つの行を付け加えると、八つの行（八行）になることである。

一般には八正道といえば、正見・正思惟・正精進・正念・正定という五つの行に、正語・正業・正命を足すことである。しかし、『佛説大安般守意經』『新出安般經』『数息品』でいう八行（すなわち八種道あるいは八正道行）は、正語・正業・正命を直身・直口・直意に取り替え、すなわち、正見・正思惟・正精進・正念・正定・直身・直口・直意になるのである。この

独特な八正道の内容において、『佛說大安般守意經』『新出安般經』『数息品』の各解釈は、極めて類似しているように思われる。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』	「数息品」
上頭為三法，意行，俱行以聲身心，如是佛弟子八行	上頭三法，三道行，已具足行，何等為三道，一直口，二直身，三直意，如是，是得道者八種道	身意造業，是三悉淨，爾乃得成八正道行

『佛說大安般守意經』に述べている「上頭為三法，意行，俱行，以聲身心。如是佛弟子八行」はオリジナルテキストから引用した文であると考えられている。

また「是名四禪，為四意斷也」<sup>68</sup>の文は前後の文脈とかみ合わない故に、おそらく、他の箇所からここに移された誤った文であろう。この文に引き続いてきた「第一行為直念，屬心常念道。……念萬物，意墮中，為不直念也。」<sup>69</sup>は、後日に付け加えられた「八行 *aṭṭhaṅgiko maggo*」を解釈する文であると考えられる。

『新出安般經』における「八行」の文は次のごとくである。

彼如應有諦，①觀，是名為直見。彼如應有諦，②至誠計，是名為直行<sup>70</sup>正計。彼如應有諦，③直身亦念攝制，是名為正方便治。彼如應有諦，④直意，生念不斷，是名為直正念意。彼如應有諦，⑤直行一向念，是名為正定。上頭三法，三道行已具足行。何等為三道？一直口，二直身，三直意，如是，是得道者八種道。<sup>71</sup>

「数息品」における「八行」の文は次のごとくである。

<sup>68</sup> CBETA, T15, no. 602, p. 170c19.

<sup>69</sup> CBETA, T15, no. 602, p. 170b19-c26.

<sup>70</sup> [行] —㊸。

<sup>71</sup> 安TEXT, 210ff-218ff.

㊦設使別觀諸法之義，是<sup>72</sup>謂正見。㊧諸所思惟，無邪之願，是為正念。㊨身意堅固，是為正方便。㊩心向經義，是為正意。㊪其心專一，是為正定。身意造業，是三悉淨，爾乃得成八正道行。<sup>73</sup>

## 小結

『佛說大安般守意經』の「㊦從諦，守諦，是名直（見）」「㊧從諦，直從行諦，是為直從行」「㊨從諦身意持，是名直治法」「㊩從諦念諦，是名直意」「㊪從諦一心意，是名直定」「上頭為三法，意行，俱行以聲身心，如是佛弟子八行」は、本文の箇所である。そしてそれらの本文の箇所に対して、「信道……念道……不欲墮四惡者。謂四顛倒……不亂意……為一心」は、註の箇所である。

「八行」においての解釈により、『佛說大安般守意經』『新出安般經』『數息品』という三經の間の関わりについて再考察を試みると、三經は緊密した繋がりを持っているように思われる。

## 四、「止觀・四諦」

『佛說大安般守意經』と『新出安般經』と「數息品」と『陰持入經』との比較

『佛說大安般守意經』における「止觀・四諦」の文は次のごとくである。止觀を行うことによって、四諦の理への悟りを獲得するという主旨を述べる内容であるし、ここで述べる止觀は、すなわち samatha と vipassanā のことである。

---

<sup>72</sup> 調 = 為㊦㊨。

<sup>73</sup> CBETA, T15, no. 606, p. 218b6-10.

①道人行道未得觀，當校計得觀。在所觀意不復轉，為得觀。②止惡一法，為坐禪，觀二法。有時觀身，有時觀意，有時觀喘息，有時觀有，有時觀無，在所因緣，當分別觀也。③止惡一法，觀二法。惡已盡，止<sup>74</sup>。觀者為觀道，惡未盡不見道，惡已盡乃得觀<sup>75</sup>道<sup>76</sup>也。④止惡一法為知惡，一切能制，不著意為止，亦為得息想<sup>77</sup>隨止。得息\*想隨止，是為止惡一法，惡已止便得觀故，為觀二法。為得四諦，為行淨，⑤當復作淨者，識苦，棄習<sup>78</sup>，知盡，行道。如日出時，淨轉出十二門故。經言：從道得脫也。去冥見明如日出時，譬如日出，多所見為棄諸冥。冥為苦，何以知為苦？多所罣礙故知為苦。何等為棄習？謂不作事。何等為盡證？謂無所有。道者，明識苦，斷習，盡證，念道。識從苦生，不得苦亦無有，識是為苦也。盡證者，謂：知人盡當老病死。證者：知萬物皆當滅，是為盡證也。⑥譬如日出作四事：一壞冥，謂慧能壞癡。二見明，謂癡除獨慧在。三<sup>79</sup>見色萬物，為見身諸所有惡露。四成熟萬物，設無日月，萬物不熟，人無有慧，癡意亦不熟也。<sup>80</sup>

『佛說大安般守意經』の①②③④は「止」と「觀」との二法を解釈する文である。

①道人行道未得觀，當校計得觀。在所觀意，不復轉為得觀。②止惡一法為坐禪，觀二法。有時觀身，有時觀意，有時觀喘息，有時觀有，有時觀無，在所因緣當分別觀也。③止惡一法，觀二法。惡

74 (爲) + 止 ㊦ ㊧ ㊨。

75 觀 = 見 ㊦ ㊧ ㊨。

76 [道] 一 ㊩。

77 想 = 相 ㊦ ㊧ ㊨\*。

78 習 = 集元明 ㊦ ㊧ ㊨ 下同。

79 三 = 不 ㊩。

80 CBETA, T15, no. 602, pp. 168c17-169a7.

已盡(爲)止，觀者爲觀道。惡未盡不見道，惡已盡乃得觀道也。  
④止惡一法爲知惡，一切能制不著意爲止，亦爲得息想隨止，得息  
想隨止，是爲止惡一法。惡已止便得觀故，爲觀二法，⑤爲得四諦  
爲行淨。<sup>81</sup>

上述の④は「得觀」について説明する文である。「得觀」とは、すなわち、「觀」を得ることである。「得觀」「得止」について安世高訳の『道地經』<sup>82</sup>では次のように述べている。

⊖若行者穿，便不得止，亦不得觀。<sup>83</sup>

⊖或時行者居前止，便得觀，或時行者當得止，觀居前得止。<sup>84</sup>

止觀の修習において最終的な目的とは、止が觀とともに行われることであるというものの、その手順を踏まえ修習していく際に、「止」「觀」のどちらを先行するかは、差し支えないものである。『修行道地經』にも同じような主旨が述べられているし、竺法護は止觀の「止」を「寂」<sup>85</sup>と訳する。

或先得寂而後入觀，或先得觀然後入寂。<sup>86</sup>

ⓑⓒⓓの文では「止」「觀」について、三回に及んで解釈している。いわば、ⓐⓑⓒⓓは『新出安般經』の「行事者。常作者。從行兩法。便滿具行。何等爲兩法。一者止。二者觀」を解釈した文にあたりと考えられる。し

<sup>81</sup> CBETA, T15, no. 602, p. 168c17-25.

<sup>82</sup> ⊖の文の最後である「觀居前得止」の「止」は、助詞の「之」に当たる。この「止」は「止觀」の「止」ではない。

<sup>83</sup> CBETA, T15, no. 607, p. 231b12-13.

<sup>84</sup> CBETA, T15, no. 607, p. 235b27-28.

<sup>85</sup> 楠山春樹(1975, p. 187, 190)は、すでに指摘している。

<sup>86</sup> CBETA, T15, no. 606, p. 211c17-18.

かし、『新出安般經』の「止亦觀雙俱行（すなわち止觀雙運）」及び「知受解四諦（すなわち四諦の現觀）」の概念は『佛說大安般守意經』には存在しないということ自体は、解釈する側だけでなく、また聽聞する側にとっても、止觀雙運と知受解（現觀）はあまりにも複雑な概念であるために、安世高はこれを意図的に略したに違いない。また、「數息品」には、「止觀雙運」の意味に近い文があるものの、「現觀」の語は存在しない。

是觀寂二，如兩馬駕一車乘行。<sup>87</sup>

ところが、『陰持入經』には、「止觀雙運」「現觀」に相当する語の「止亦觀雙俱行」「相應」がある。つまり、『新出安般經』の「止亦觀雙俱行行。便行知受解四諦。」の文は、『陰持入經』<sup>88</sup> から編成したものであると推察される。

彼為止觀俱隨行，一處一時一意，本來有是有意，令為作四事。何等為四？一為苦，從苦已解為苦相應。……<sup>89</sup>

この『陰持入經』の文に該当するパーリ文は次のごとくである。

Tattha samathavipassanā yuganaddhā vattamānā ekakāle ekakkhaṇe ekacitte cattāri kiccāni karoti, dukkhaṃ pariññābhisamayena abhisameti, yāva....<sup>90</sup>

下図に『佛說大安般守意經』と『新出安般經』と「數息品」と『陰持入

87 『修行道地經』「數息品」, CBETA, T15, no. 606, p. 218b12。

88 CBETA, T15, no. 603, p. 179b1-3.

89 同上註。

90 Peṭakopadesa, p. 134, 12ff-14ff.

經』との互いに対応する関係を示そう。

『佛説大安般守意經』 <sup>91</sup>	『新出安般經』 <sup>92</sup>	「数息品」 <sup>93</sup>	『陰持入經』 <sup>94</sup>
止惡一法觀二法…為 得四諦為行淨	止亦觀雙俱行，行便 行知受解（四諦）	是觀寂二，如兩 馬駕一車乘行	彼為止觀俱隨 行，…為苦相應

なお、『佛説大安般守意經』における「四諦」の㊦「識苦，棄習，知盡，行道」の文は、明らかに『新出安般經』の「一識苦，二舍習，三盡自證，四行道滿。」の文と対応している。また、「数息品」における「四諦」の文を調べてみると、「四諦」の概念が確かに存在していると考えられる。止観を行うことによって、四諦それぞれ忍の慧、十六つの無漏心のみならず、初果（道跡）ないし阿羅漢果（永盡苦本）までも獲得できるという趣旨を示している。

此八正道中，正見，正念，正方便，計是三事屬觀。其正意，正定，是二事則屬寂然。是觀寂二，如兩馬駕一車乘行。……解知苦……苦隨忍……解習斷除法忍……習慧……滅盡法慧之忍……滅盡之慧……法慧道忍……道慧，是為第十六無漏之心。……即成道跡會至聖賢，七反生天七反人間，永盡苦本。<sup>95</sup>

しかし、『陰持入經』には『新出安般經』にもっと近い文があるから、『新出安般經』における「四諦」の文は直接『陰持入經』から引用したものであると考えられる。

<sup>91</sup> CBETA, T15, no. 602, p. 168c20.

<sup>92</sup> 奘TEXT, p. 192 (=写本, p. 215), 220ff。

<sup>93</sup> CBETA, T15, no. 606, p. 218b12.

<sup>94</sup> CBETA, T15, no. 603, p. 179b1-3.

<sup>95</sup> CBETA, T15, no. 606, p. 218b10-c22.

為識苦為斷集。為盡自證為行道滿。<sup>96</sup>

「四諦」に関して、『佛說大安般守意經』と『新出安般經』と「数息品」と『陰持入經』との対照する関係を示す。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』	「数息品」 <sup>97</sup>	『陰持入經』
識苦，棄習，知盡，行道	一識苦，二舍習，三盡自證，四行道滿	解知苦…苦隨忍…解習斷除法忍…習慧…滅盡法慧之忍…滅盡之慧…法慧道忍…道慧	為識苦，為斷集，為盡自證，為行道滿

つまり、『佛說大安般守意經』における「四諦」の㊦は、『新出安般經』の「止亦觀雙俱行，行便行，知受解<sup>98</sup> 四諦。一識苦，二舍習，三盡自證，四行道滿。」を解釈した文にあたるように思われる。

また、「淨轉出十二門」の語は『佛說解十二門經』<sup>99</sup> の「淨為出十二門」に由来すると考えられる。

㊦當復作淨者：識苦，棄習，知盡，行道。如日出時，淨轉出十二門故。經言：從道得脫也。去冥見明，如日出時，譬如日出，多所見，為棄諸冥。冥為苦，何以知為苦？多所罣礙，故知為苦。何等為棄習？謂：不作事。何等為盡證？謂無所有。道者：明識苦，斷

<sup>96</sup> 『陰持入經』，CBETA, T15, no. 603, p. 179b22-23。

<sup>97</sup> CBETA, T15, no. 606, p. 218b14-c17。

<sup>98</sup> 「知受解」の語は、安世高の他の訳経には殆ど出てこない。しかし PSSB のパトリ文を調べると、該当する abhisamaya 又は、abhisameti が出ており、前者は名詞で、後者は、動詞である。両者とも現觀の意味で、『陰持入經』では「相應」と訳されている。また、デレアヌ フロリン（2004, p. 31）も論文中で「現觀」と記す。

<sup>99</sup> 解TEXT, p. 417ff.

習，盡證，念道。識從苦生，不得苦亦無有識，是為苦也。盡證者，謂：知人盡當老病死。證者，知萬物皆當滅，是為盡證也。<sup>100</sup>

『佛説大安般守意經』における「日の譬え」の①は、明らかに『新出安般經』の「譬如日出作四事：一壞冥，二爲現明，三爲見色萬物，四成熟萬物。」の解釈文であると指摘したい。

①譬如日出作四事：一壞冥，謂慧能壞癡。二見明，謂癡除獨慧在。三見色萬物，為見身諸所有惡露。四成熟萬物。設無日月萬物不熟，人無有慧，癡意亦不熟也。<sup>101</sup>

「日の出の譬え」に関して「数息品」<sup>102</sup>には関係する用語があるが、この段落とは関係のないようである。しかし、『陰持入經』には『新出安般經』とほぼ一致する文が見られる。『新出安般經』の「日の出の譬え」は、明らかに『陰持入經』<sup>103</sup>から引用したものであるとされている。というのは、安般の修習に関する主な文献の調べによれば、安般法——特に六事には、止観とのかかわりを述べているが、止観双運（止観双俱行）との関係は見当たらないからである。

譬如日出：上至竟，為現作四事，致明，壞冥，現色，現竟。<sup>104</sup>

<sup>100</sup> CBETA, T15, no. 602, pp. 168c25-169a4.

<sup>101</sup> CBETA, T15, no. 602, p. 169a4-7.

<sup>102</sup> 『修行道地經』「五陰相品」「其慧覺了勝日出。」CBETA, T15, no. 606, p. 183a21；「無學品」「如日出除雲。」CBETA, T15, no. 606, p. 223b8；「菩薩品」「譬如日出，眾冥皆索。」CBETA, T15, no. 606, p. 229b8-9。

<sup>103</sup> CBETA, T15, no. 603, p. 179b11-12.

<sup>104</sup> 同上註。

Yathā vā sūriyo udayanto ekakāle apubbaṃ acarimaṃ cattāri kiccāni  
karoti, andhakāraṃ vidhamati, ālokaṃ pātukaroti, rūpaṃ nidassiyati,  
sītaṃ pariyādiyati.<sup>105</sup>

次に、「日の出の譬え」に関して『佛說大安般守意經』と『新出安般經』と「数息品」と『陰持入經』との対応するところを示す。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』	「数息品」	『陰持入經』
譬如日出作四事， 一壞冥，…二見 明，…三見色萬 物，…四成熟萬物	譬如日出作四事， 一壞冥，二爲現 明，三爲見色萬 物，四成熟萬物	なし	譬如日出，上至 竟，爲現作四事， 致明，壞冥，現 色，現竟

『新出安般經』における「止觀・四諦」の文は、次のごとくである。

行事者，常作者，從行兩法，便滿具行。何等爲兩法？一者止，二者觀。①止亦觀雙俱行，行便行，知受解四諦。一識苦，二舍<sup>106</sup>習，三盡<sup>107</sup>自證，四行道滿。②譬如日出作四事，一壞冥，二爲現明，三爲見色萬物，四成熟萬物。止觀亦如是，正雙行，便知受解四諦。一識苦，二舍<sup>108</sup>習，三盡<sup>109</sup>自證，四諦行滿也。彼如應有諦，③欲愛<sup>110</sup>不復愛<sup>111</sup>，意解得脫，癡解，從解慧<sup>112</sup>得

<sup>105</sup> Peṭakopadesa, p. 134, 24ff-26ff.

<sup>106</sup> 舍=念㊦。

<sup>107</sup> 盡=喜㊦。

<sup>108</sup> 舍=念㊦。

<sup>109</sup> 盡=書㊦。

<sup>110</sup> 愛=受㊦。

<sup>111</sup> 愛=受㊦。

<sup>112</sup> 慧=惠㊦。

脱，④是名爲度世，從世間得脱。彼如應有諦，⑤知盡<sup>113</sup>，⑥智慧<sup>114</sup>足，知生不復生，⑦智慧<sup>115</sup>，是<sup>116</sup>名爲慧明，如是是<sup>117</sup>兩法，是時行具足⑧慧<sup>118</sup>亦脱。<sup>119</sup>

## 小結

### 止と觀における本文と註に関して

『佛説大安般守意經』の「㊦止惡一法・觀二法」「㊧爲得四諦爲行淨」は、本文の箇所であって、そしてそれらの本文の箇所に対して、「惡已盡(爲)止，觀者爲觀道，惡未盡不見道，惡已盡乃得觀道也……」は、註の箇所である。

### 四諦における本文と註に関して

『佛説大安般守意經』の「識苦，棄習，知盡，行道」は、本文の箇所である。そしてこの本文に対して、「何以知爲苦？多所罣礙，故知爲苦。何等爲棄習？謂不作事。何等爲盡證？謂無所有。道者：明識苦，斷習，盡證，念道。識從苦生，不得苦亦無有識，是爲苦也。盡證者，謂：知人盡當老病死，證者知萬物皆當滅，是爲盡證也。」は、註である。

### 日の出の喩えにおける本文と註に関して

『佛説大安般守意經』の「譬如日出作四事，一壞冥，……二見明，……三見色萬物，……四成熟萬物。」は、本文の箇所である。そしてこの本文に対して、「謂慧能壞癡」「謂癡除獨慧在」「爲見身諸所有惡露」「設無日月萬物不熟，人無有慧癡意亦不熟也」は、註の箇所である。

---

113 盡=書㊦。

114 慧=惠㊦。

115 慧=惠㊦。

116 是=足㊦。

117 [是]—㊦。

118 慧=惠㊦。

119 ㊦TEXT, 218ff-230ff.

三十七道品→止觀→四諦という修習の次第において、『佛說大安般守意經』『新出安般經』及び「数息品」での記述は、極めて類似しているが、「数息品」では「止亦觀雙俱行（止觀双運）」「譬如日出作四事」についてまったく触れていないため、その出自出典は『新出安般經』のオリジナルテキストの文ではないと考えられている。

さらに、『新出安般經』の「止觀・四諦」の文は、殆ど『陰持入經』から出てくる上に、『新出安般經』の「①止亦觀雙俱行，行……是時行具足⑧慧亦脱。」は、『陰持入經』から引用されていて、そして再編成された文であるとも指摘したい。

## 五、「四解依」

### （一）南・北伝における「四無碍解」に関して

「四無碍解」（または「四無碍辯」とは法無碍解、義無碍解、詞無碍解及び辯無碍解のことで、その典拠に関して第一類の法→義→詞→辯の順番と第二類の義→法→詞→辯の順番との二種類<sup>120</sup>がある。前者は毘曇（論）に属する類であり、後者は經に属する類である。南伝・パーリ語系の仏典・論では殆ど、第二類に属するものである。北伝・漢訳語系に関しては經に述べた二種類<sup>121</sup>とも見られるが、論では殆どは第一類の法→義→詞→辯という順番を取るものである。

120 『阿毘達磨順正理論』卷 76：「故無礙解建立有四，……又經列此先義後法，諸對法中先法後義。」CBETA, T29, no. 1562, p. 751b23-26。

121 例えば、『增壹阿含經』には（二）の類があるが（CBETA, T2, no. 125, p. 639a28-b2; p. 656c27-28）、『長阿含經』では（一）の類が見られる（CBETA, T1, no. 1, p. 51a19; p. 53b21-22）。

## (二)『新出安般經』における「四解依」に属する學派と内容に関して

まず、『新出安般經』における「四解依」の文を次のように示す。

[ I 段 ] 彼如應有諦，①從世間法行，有亦②法世間著，是色陰種，是思想陰種，是生死行<sup>122</sup> 陰種，是識陰種，常<sup>123</sup> 斷所在，從慧<sup>124</sup> 生不漏，<sup>125</sup> 是名<sup>126</sup> 爲得③法解。

[ II 段 ] 彼如應有諦，④從本生，有亦⑤從本因緣著，是色<sup>127</sup> 陰種也，是痛痒痛<sup>128</sup> 痒陰種，是思想陰種，是生死陰種，是識陰種，當斷，從是慧<sup>129</sup> 生道慧<sup>130</sup> 明不漏<sup>131</sup>，是名爲⑥利解。

[ III 段 ] 已若有名，解知是法，思處可能，如有⑦投<sup>132</sup> 說，如有⑦a 可見，若陰，若行，⑦b 若入，⑦c 若從正，起非常<sup>133</sup> 者，苦者，空者<sup>134</sup>，非身者，當從是已斷，從是慧<sup>135</sup> 起，得道不漏<sup>136</sup>，是名爲⑧分別投解。

---

122 [行] — ㉑。

123 常 = 覺 ㉑。

124 慧 = 惠 ㉑。

125 漏 = 滿 ㉑。

126 [名] — ㉑。

127 色 = 也 ㉑。

128 痛 = 痒 ㉑。

129 慧 = 惠 ㉑。

130 慧 = 惠 ㉑。

131 漏 = 滿 ㉑。

132 投 = 捉 ㉑。

133 常 = 當 ㉑。

134 [者] — ㉑。

135 慧 = 惠 ㉑。

136 漏 = 滿 ㉑。

〔IV段〕彼如應有諦，從慧慧<sup>137</sup> 知，慧慧<sup>138</sup> 成，從慧慧<sup>139</sup> 解，當彼更斷，從是慧<sup>140</sup> 生起，得明慧<sup>141</sup> 不漏，<sup>142</sup> 是名爲⑨辯才博解。道依如是，是四解依。<sup>143</sup>

『新出安般經』の「四解依」（すなわち四無碍解）とは、法解→利解→分別投解→辯才博解のことで、その用語と順番から、北伝の論典、すなわち阿毘達磨に属するものと判断できる。

また、〔I段〕法解、〔II段〕利解それぞれの内容から見れば、前者は世俗諦に属し後者は勝義諦に属するとも見られる。<sup>144</sup> また、阿毘達磨における世俗・勝義諦の定義<sup>145</sup> から、法解は世俗、利解は勝義という趣旨とも合致していると推察される。

『新出安般經』の〔I段〕の「①從世間法行」とは世間において法が行われるという意味である。一方、「②法世間著」は法の世間着であると意味づけをする。「世間着」は安世高訳の『七處三觀經』にも見られる。「③法解」は「法無碍解」に該当する。

---

137 慧慧=惠惠⑥。

138 慧慧=惠惠⑥。

139 慧慧=惠惠⑥。

140 慧=惠⑥。

141 慧=惠⑥。

142 漏=滿⑥。

143 安TEXT, 230ff-242ff.

144 『阿毘達磨順正理論』卷 76：「又達世俗勝義二諦，名初二無碍解。」CBETA, T29, no. 1562, p. 751b11-12。『阿毘達磨俱舍論』卷 27〈七分別智品〉：「於中法詞二無碍解，唯俗智攝。」CBETA, T29, no. 1558, p. 142a29-b1。

145 『阿毘達磨大毘婆沙論』卷 77：「隨順世間所說名是世俗……宣說緣性緣起等理，不虛妄心所起言說是勝義諦。」CBETA, T27, no. 1545, p. 400a27-b2。

有四著，何等為四？一為欲著，二為世間著，三為見著，四為癡著。146

Cattārome, bhikkhave, yogā. Katame cattāro? Kāmayogo, bhavayogo, ditṭhiyogo, avijjāyogo.<sup>147</sup>

『新出安般經』の〔Ⅱ段〕は、「義無碍解」を述べる文であると思われる。

『新出安般經』の「④從本生」は『陰持入經』にも見られる。原語は paṭiccasamuppādesu であり「縁起により」の意味でもある。『本相猗致經』『人本欲生經』などの安世高の多数の訳經にも、『新出安般經』の「⑤本因縁」が見られるし、<sup>148</sup> の原語は idappaccayā で、「縁生」という意味でもある。

了從本生，了從本法已生。149

...vā paṭiccasamuppādesu vā paṭiccasamuppannesu vā dhammesu... 150

今見分明，從是本因縁，令致有愛，有愛比丘從致有本，不為無有本，何等為比丘從有愛致本？謂：為癡。151

146 『七處三觀經』，CBETA, T2, no. 150A, p. 876c9-10。

147 ANii, IV. 10, Yogasutta, p. 10, 15ff-16ff.

148 『人本欲生經』「從本因縁生死。」CBETA, T1, no. 14, p. 242a5。『雜阿含經二十七經』「我故現其本因縁。」CBETA, T2, no. 101, p. 496b19。『七處三觀經』「癡大病，從本因縁生觀大藥。」CBETA, T2, no. 150A, p. 882a21-22；「從是本因縁已，已斷本，上下不復見，後不復生。」CBETA, T2, no. 150A, p. 882c21-22)。『佛說大安般守意經』「安為本因縁，般為無處所。」CBETA, T15, no. 602, p. 164a1-2；「信本因縁，知從宿命有。」CBETA, T15, no. 602, p. 172b21。『阿含口解十二因縁經』「人生墮地未有所知，便喜向其母者，意識本因縁故耳。」CBETA, T25, no. 1508, p. 54c4-5。

149 『陰持入經』，CBETA, T15, no. 603, p. 176a13。

150 Paṭakopadesa, p. 122,17ff.

151 『本相猗致經』，CBETA, T1, no. 36, p. 819c24-26。

Atha ca pana paññāyati ‘idappaccayā bhavataṇhā’ti. Bhavataṇhām p’haṃ, bhikkhave, sāhāraṃ vadāmi, no anāhāraṃ. Ko cāhāro bhavataṇhāya? Avijjā ti’ssa vacanīyaṃ.<sup>152</sup>

有老死因緣。<sup>153</sup>

‘Atthi idappaccayā jarā-maraṇaṃ’ti iti...<sup>154</sup>

つまり、『新出安般經』の「③法解」と「⑥利解」の定義から「法無碍解」及び「義無碍解」に該当していると思われる。

### （三）〔Ⅲ段〕の「若陰・若行・若入」について

『新出安般經』に⑦a「若陰，若行，若入，若從正，起非常者，苦者，空者，非身者」の文が述べている。「若陰，若行，若入」の「若行」<sup>155</sup>は「若持」の誤植であるという説について、次に二つの理由をあげる。

《理由1》「行」の字体は「持」の字体と類似している上で、書写の時に生じた誤植であった。

《理由2》『陰持入經』に「五陰・十八本持・十二入」と「非常・苦・空・非身」の対応した文が見られる。その内容は次の如くである。

名為五陰種，當知，是是從何知，為非常苦空非身，從是知。<sup>156</sup>

Ime pañcakkhandhā. Tesam kā pariññā? Aniccaṃ dukkhaṃ saññā anattāti esā tesam pariññā.<sup>157</sup>

<sup>152</sup> ANv, X. 62, Taṇhāsutta, p. 116, 18ff-21ff.

<sup>153</sup> 『人本欲生經』，CBETA, T1, no. 14, p. 242a9。

<sup>154</sup> DNii, 15, Mahānidānasutta, p. 55, 17ff.

<sup>155</sup> 影印の文字は A 本・B 本とも「行」の字に見られるが、A 本は原本からの書写されたものであることから、誤植の可能性がある。

<sup>156</sup> 『陰持入經』，CBETA, T15, no. 603, p. 173b21-22。

是名為十八本持，已知是從何知？為非常苦空非身，是為知，從是知。<sup>158</sup>

Etāyo aṭṭhārasa dhātuyo. Tāsaṃ pariññā aniccaṃ dukkhaṃ saññā anattāti esā etāsaṃ pariññā. <sup>159</sup>

是為十二入，一切從何知，為非常苦空非身，是從是知。<sup>160</sup>

Etāni dvādasa āyatanāni. Etesaṃ kā pariññā? Aniccaṃ dukkhaṃ saññā anattāti, esā etesaṃ pariññā. <sup>161</sup>

『新出安般經』にある「陰 dukkha・持 dhātu・入 āyatana を觀察するところ、それらを非常のもの、苦のもの、空のもの、非身のものとして正しく理解する」文は、上述した『陰持入經』の文と見合わせてみると、意味上にはかなり類似している。さらに、『新出安般經』のこの段の文は、『陰持入經』からの編成したものとも見られる。

『新出安般經』の「㊸分別投解」の定義から「詞無碍解」に該当していると思われる。

#### (四)〔IV段〕における慧慧知・慧慧成・慧慧解について

IV段の辯才博解は、新訳では辯無碍解と訳される。『順正理論』の提示からは、辯才博解の慧は前の三つの慧を所縁とする慧になると判る。

三智即前三無礙解，即緣三種無罣礙智，名第四無礙解。<sup>162</sup>

---

<sup>157</sup> Peṭakopadesa, p. 112, 20ff-22ff.

<sup>158</sup> 『陰持入經』，CBETA, T15, no. 603, p. 173c2-3。

<sup>159</sup> Peṭakopadesa, p. 113, 7ff-9ff.

<sup>160</sup> 『陰持入經』，CBETA, T15, no. 603, p. 173c13-14。

<sup>161</sup> Peṭakopadesa, p. 113, 23ff-25ff.

「慧慧知」とは、③「法解」の慧を所縁とする慧を知るという意味で、「慧慧成」とは、⑥「利解」の慧を所縁とする慧を成就するという意味で。

「慧慧解」とは、⑧「分別投解」の慧を所縁とする慧を解するという意味である。つまり、最初の三つの慧を所縁とする慧は、第四番の「辯才博解」の慧である。

『新出安般經』の「⑨辯才博解」の定義から「辯無碍解」に該当していると思われる。

## （五）『佛說大安般守意經』における「四解依」文について

『佛說大安般守意經』における「四解依」文の部分は、『新出安般經』と対応できると見られる。

まず、『佛說大安般守意經』における「四解依」の文を次に示す。

[A 段] 從諦念法，㉑意著法中，從諦念法，㉒意著所念，㉓是便生是，求生死得生死，求道得道，内外隨所<sup>162</sup>起意，是為念法。  
㉔意著法中者，從四諦自知意，生是當得是，不生是不得是，便却意，畏不敢犯，所行所念常在道，是為意著法中也，是名為㉔1 法正。

[B 段] 從諦，㉕本起㉕1 本著意，㉖法正者謂道法，從諦謂四諦。㉗本起（本）著意者，謂：所向生死萬事，㉗1 皆本從意起，㉗2 便著意，便有五陰，所起意當斷，斷本，五陰便斷，有時自斷不念，意自起為罪。復不定在道，為罪未盡故也。

162 『阿毘達磨順正理論』，CBETA, T29, no. 1562, p. 751b10-11。

163 所=行<sup>㉗</sup>。

[C 段] ㉞ 意著法中者。諦意念萬物為墮外法中，意不念萬物為墮道法中。五陰為生死法，三十七品經為道法。㉟ 意著法中者，謂制五陰不犯，亦謂常念道不離，是為意著法中也。

[D 段] ㊱ 所本正者，所在外為物，本為福，所在内總為三十七品經。行道非一時端故，言所本（正）<sup>164</sup> 者，謂：行三十七品經法，如次第隨行，意不入邪為正故，名為所本正。所本正各自異，行（所）以無為對，本以不求為對，正以無為為對，無為以不常為對，道以無有為對，亦無有所，亦無有本，亦無有正，為無所有也，㊲ 定覺受身㊳如是法。道説<sup>165</sup> 謂：法定，㊴a 道説者，謂説所從因緣得道。

[E 段] ㊴ 見陰受者，為受五陰。㊵ 有入者，為入五陰中，因有生死，㊶ 陰<sup>166</sup> 者為受正，㊷ 正者道自正，但當為自正心耳。<sup>167</sup>

## (六)「法正」の意味について

「法正」は、『新出安般經』の「法解」すなわち「法無碍解」に該当する。

『佛説大安般守意經』の〔A 段〕〔C 段〕及び〔B 段〕の㉟は、「法正」を解釈する部分である。その内容には、「意著法中」は何回も繰り返し解釈されている。

[A 段] ……㉟ 意著法中者，從四諦自知意，生是當得是，不生是不得是，便却意，畏不敢犯，所行所念常在道，是為意著法中也。…… [C 段] ㉞ 意著法中者，諦意念萬物為墮外法中，意不念

<sup>164</sup> 「言所本者」の「所本」は前後の文脈とも「所本正」の語があるから、「所本」の直後に「正」字が落ちたと見られる。

<sup>165</sup> この「道説」は「㊴I 道説」重複語であると見られる。

<sup>166</sup> この「陰」の前或いは後に「受」字が落ちたと見られ、つまり、「受陰」或いは「陰受」にすべきであり、「受五陰」と同意味である。

<sup>167</sup> CBETA, T15, no. 602, p. 169a9-b3.

萬物為墮道法中。五陰為生死法，三十七品經為道法。①意著法中者，謂制五陰不犯，亦謂常念道不離，是為意著法中也。<sup>168</sup>

『佛說大安般守意經』の〔A 段〕の「㉑意着法中」とは、（常に）「法」を着く、つまり、法を行うという意味である。

「㉒意着所念」とは、「意は所念に執着する」という意味である。

つまり、「㉑意著法中……㉒意著所念」は『新出安般經』の「①從世間法行……②法世間著」と対応している上で、〔A 段〕は「法無碍解」に該当している。そして、この段の㉑1「法正」<sup>169</sup>は、『新出安般經』の③「法解」と対応している。

### （七）『佛說大安般守意經』の〔B 段〕の「本起・本著意」の意味

〔B 段〕の「本起・本著意」は、『新出安般經』の「本生・本因縁着」に該当し、「利解」すなわち「義無碍解」を解釈すると推察できる。その中、「㉑本起」の語が『新出安般經』の「④從本生」に該当している。

『陰持入經』の「本從起」<sup>170</sup>の語を PSSB と対照してみると、その原語は paṭīcasamuppāda にあたっているとわかる。それゆえに、『新出安般經』の④「本生」＝『佛說大安般守意經』の「㉑本起」＝paṭīcasamuppāda

<sup>168</sup> 同上註。

<sup>169</sup> 安世高訳語の「法正」について『普法義經』に一つの例が見られ、「覺一切念可聞法正」CBETA, T1, no. 98, p. 922c7-8。この語は真諦訳の『廣義法門經』の「正法」と対応できる。「憶持前後，而聽正法。」CBETA, T1, no. 97, p. 919c21-22。

<sup>170</sup> 『陰持入經』では PSSB の “vicikicchā paññāto, paṭīcasamuppādato nivārayati.” が「疑為却慧，不知本從起，為却解明」と訳されているが、Nanamoli はこの段のパーリ文を “...and uncertainty hinders from understanding as (?) [that of] dependent arising.” (The Piṭaka-Disclosure PTS, 1979, p. 185, 15ff-16ff) と英訳している。安世高が見た原典は PSSB と一致すれば、もっと正確的に「疑為却知本從起」と訳すべきであると考えられる。

という対応の関係が成り立つと断言できる。

疑為却慧，不知本從起，為却解明。171

...vicikicchā paññāto, paṭiccasamuppādato nivārayati. 172

『佛說大安般守意經』の「㊦本起」は、二箇所出ているのに対して、『雜阿含經二十七經』の第8經と第12經にはそれぞれ一箇所見られる。

第12經には、同經と対応するパーリのSN III. 22. 56 *Upādānaṃ parivṭṭaṃ* および同本異訳の『雜阿含經』の41經が収録されているから、その内容を対照してみると、安世高は *samudayaṃ* を「本起」と訳したと明かにされた。求那跋陀羅はそれを「集」と訳したが、安世高の他の訳経において *samudayaṃ* は殆ど「習」と訳されている。

第8經に対応のパーリ原文はないが、「本起」自体の内容をみると、習 *samudayaṃ* という事より、むしろ縁起 *paṭiccasamuppāda* の意味に近いであろう。

度世說不致。壞欲欲思想，意不可俱爾。亦除曉睡暝，亦還結疑。

觀意除淨，本起思惟法。已說度世慧，亦說壞癡，佛說如是。173

『佛說大安般守意經』の「本起」は「㊦1 本從意起」と解釈されるため、「本起」=「意」は格義的な解釈とされている。

「㊦2 便著意，便有五陰，所起意當斷，斷本，五陰便斷。」の「意」を『新出安般經』の「因縁」と解釈するとしたら、174 この段の文は『新出安般經』の「㊦5 從本因縁著，是色陰種也，是痛痒痛痒陰種，是思想陰種，是生

171 『陰持入經』，CBETA, T15, no. 603, p. 180b8。

172 *Petaḥkopadesa*, p. 138, 13ff-14ff.

173 『雜阿含經二十七經』第8經，CBETA, T2, no. 101, p. 495b3-6。

174 確かに『佛說大安般守意經』では「意為因縁」の語が見られる。「安為生，般為滅，意為因縁，守者為道也。」CBETA, T15, no. 602, p. 163c22-23。

死陰種，是識陰種，當斷。」と対応していると考えられる。

インド仏教において「縁起」は最も重要かつ意味深い概念であったが、恐らく後漢時代の人々にとってあまりにも難解な概念であるために、安世高は当時に流行った修行道で最高位として位置づけられた「意」の語に変換したに違いない。

要するに、『佛說大安般守意經』の「㊸本起」は『新出安般經』の「④本生」、「㊸1 本著意」は『新出安般經』の「⑤本因縁著」を指していると考えられる。

### （八）『佛說大安般守意經』の〔E 段〕の内容について

『佛說大安般守意經』の〔E 段〕の内容から、〔Ⅲ段〕『新出安般經』の「⑧分別投解」一部を解釈するものであると思われる。

その中、「㊸見陰受者為受五陰」の「見陰受」は『新出安般經』の「⑦a 可見若陰」、「㊸有入者為入五陰中」の「有入」は『新出安般經』の「⑦b 若入」に該当している。

#### 「正」の語義について

『佛說大安般守意經』の「㊸陰者為受正，正者道自正，但當為自正心耳。」の「正」は、その前に載せる〔D 段〕の「如次第隨行。意不入邪為正故」の「正」を指し、また、『新出安般經』の〔Ⅲ段〕の「⑦c 從正」とも考えられる。つまり、次のような対応の関係が見られる。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』
㊸見陰受	⑦a 可見若陰
㊸有入	⑦b 若入
㊸正者	⑦c 若從正

## (九) 『佛說大安般守意經』の〔D段〕の内容について

『佛說大安般守意經』の〔D段〕の内容は、『新出安般經』の〔IV段〕、つまり「辯才博解」(=辯無碍解)を解釈するものとも見られる。その中、D段〕①「所本正」は、三回も言及され、いったい、「所本正」はなにを指すのであろう。前述した 15.4 の〔IV段〕には、『順正理論』の提示から「第四無礙解」は前の三つの「無礙解」の慧を所縁とする慧であると判る。『新出安般經』の「四解依」の〔I段〕〔II段〕〔III段〕には、「所」「本」「正」のキーワードが次のように見出される。

〔I段〕に「常斷所在」の「所」、

〔II段〕に「④從本生，有亦⑤從本因緣著」の「本」、

〔III段〕に「⑦c 若從正」の「正」が見られる。つまり、「所・本・正」それぞれは、『新出安般經』の最初の三つの「無礙解」つまり、「法解」「利解」「分別投解」を指すと推定される。

### 「所・本・正」の意味

#### 「所」の意味について

〔D段〕①に「所在外為物……所在内總為三十七品經」に一組の「所在外」「所在内」という対照的な用語がみられる。安世高の著作から、「所在」を生命体に意味づけの例がある。また、彼は「世俗のもの」と「仏法を修習すること」とを「外」「内」という二分法に分ける傾向があり、また、「身」「物」を「外」、「意」「法」を「内」に指す例も次のように多数見られる。

外從身内從意故。175

待在外為萬物，念在内為思。176

175 『阿含口解十二因緣經』，CBETA, T25, no. 1508, p. 53b29-c1。

176 『法觀經』，CBETA, T15, no. 611, p. 241b22-23。

とりわけ、「法解」（=法正）を解釈する〔C段〕に

意著法中者，諦意念萬物為墮外法，中意不念萬物為墮道法中。五陰為生死法，三十七品經為道法。<sup>177</sup>

という内容がある。また、他の箇所にも

内七覺意者，謂三十七品經，外七覺意者，謂萬物也。<sup>178</sup>

という文も見られるから、「所」は、「所在外・所在内」の「所」を指すのである。また、〔A段〕の最後には、「所行所念……名為④1 法正」の文があるから、「所」は、「法正」の段落を指すと考えられる。さらに、『新出安般經』の〔I段〕に「常斷所在」用語も見られるから、「所」は、「法解」の段落を指すと思われる。つまり、「所・本・正」の「所」は、第一番目の「法解」（=法正）を指すと推察できる。

### 「本」の意味について

「本」は、『新出安般經』の「④從本生。有亦⑤從本因緣著」の「本」を指すと見られる。また、『佛說大安般守意經』の〔B段〕に「本起本著意……皆本從意起……斷本五陰便斷」の文があるから、「本」は「義無碍解」を指すと判る。つまり、二番目の「利解」をさすのである。「四無碍解」の中では「義無碍解」（=利解）のみ勝義諦に属する。「本」（=勝義）は、福である（本為福）という意味づけがある。

法詞二無礙解，世俗智。義無礙解，諸有欲令唯涅槃，是勝義者。<sup>179</sup>

177 CBETA, T15, no. 602, p. 169a9-b3.

178 『佛說大安般守意經』，CBETA, T15, no. 602, p. 72b1-2。

179 『阿毘達磨大毘婆沙論』，CBETA, T27, no. 545, p. 904b15-16。

また、〔D 段〕に「如次第隨行」の用語があり、これはこの三つの「無碍解」は修習の順番、つまり「法」→「義」→「詞」という順番があることを暗示する。

偈曰：前三名義言，次第無礙解。180

さらに、「所本正各自異」の文があるから、「所」「本」「正」すなわち「法」「義」「詞」はそれぞれ異なるものであるとも暗示している。

### 「正」の意味について

「所・本・正」の「正」は、『新出安般經』の〔Ⅲ段〕⑦c「若從正」の「正」を象徴する。また、『佛說大安般守意經』の〔E 段〕の最後に「㊦正道自正。但當為自正心耳」の文があるから、「正」は、第三の「無碍解」を指すのである。

つまり、「正」は、第三番の「分別投解」(=詞無碍解)を指す。  
また、次の文の意味を分析すれば、

行(所)以無為對，本以不求為對，正以無為為對，無為以不常為對，道以無有為對，亦無有所，亦無有本，亦無有正，為無所有也。181

次のような三段落の文が分けられる。

1. 行(所)以無為對，本以不求為對，正以無為為對。
2. 無為以不常為對，道以無有為對。
3. 亦無有所，亦無有本，亦無有正，為無所有也。

次の『陰持入經』の文とその対応するパーリ文から見れば、漢訳語の

180 『阿毘達磨俱舍釋論』，CBETA, T29, no. 1559, p. 293a27。

181 CBETA, T15, no. 602, p. 169a9-b3。

「為對」は、“paṭipakkhena” に還元でき、「対治」との意味を有する。

Katamo eko vipallāso ca? Yena paṭipakkhena vipallāsitaṃ gaṇhāti  
anicce niccam iti.<sup>182</sup>

何等為一倒，為對或受，非常為常。<sup>183</sup>

つまり、上文中の 1、2、3 という三つの文は、妥当な見分けであると考えられる。したがって、1 の「行以無為對」の「行」は、「所」の誤写であると判る。

また、「辯無碍解」の「辯」には、二つの意味が含まれる。

第一、正理に応じて「法無碍解」「義無碍解」における「文・義」を正しく理解し広め、さらに言葉に障害なく、これは、第四番の「辯」の意味である。

第二、また、このようなあらゆる能力は、自由自在に現われる。これは定・慧の二道による故である。したがって、〔D 段〕に「Ⓚ定覺受身①如是法」の文も見られる。その意味は、禅定中にそれらの三つの「無碍解」の法を体験できるという意味である。これも第四番の「辯」の意味である。

次に、「道説」の語義について検討しよう。

『佛說大安般守意經』の「①道説謂法定，道説者，謂：説所從因緣得道。」にでる「道説」の用語について、安世高の訳經の視点を基づき、新たに考察したい。

『長阿含十法報經』、これと対応するパーリの『長部經典』の“Dasuttara- Suttanta”および同本異訳の『長阿含經十上經』を対照してみると、sathā dhammaṃ deseti を「道説經」と訳した安世高の訳語に対し、仏陀耶舎と竺仏念の二人は「仏説法」と訳したことが判明する。いわば安世高は sathā 大師を「道」と訳し、deseti を「説」と訳したのである。

<sup>182</sup> Peṭakopadesa, p. 120, 5ff-6ff.

<sup>183</sup> 『陰持入經』，CBETA, T15, no. 603, p. 175b25-26。

...bhikkhuno Satthā dhammaṃ deseti aññataro vā garuṭṭhāniyo  
sabrahmacāri.<sup>184</sup>

若學者道説經從道聞，亦慧人説從慧人聞，亦同學者聞。<sup>185</sup>

若比丘聞佛説法，或聞梵行者説，或聞師長説。<sup>186</sup>

安世高訳の『雜阿含二十七經』第 16 經、これと対応するパーリの A. II, 2.1 Adhikaraṇa および同本異訳の『雜阿含經』661 經を対照したところ、前者の「道説」の語は後者の「仏説」に該当すると明かされたが、残念ながらこの文に対応するパーリ文は既に存在していない。

道説之如是，比丘歡喜起作禮。<sup>187</sup>

佛説此經已，諸比丘聞佛所説，歡喜奉行。<sup>188</sup>

しかしこのような「道説」イコール「仏説」の仮説は、この段の意味と全く無関係のように見られる。むしろ、「道説」は、「辯無碍解」と緊密に関係のある用語とも考えられる。

法無礙解縁名句文身，義無礙解或有欲令唯縁減諦，或有欲令縁一切法，詞無礙解縁言詞，辯無礙解縁道及説。<sup>189</sup>

つまり、〔D 段〕の①a〔道説〕は、前段の『大毘婆沙論』中の「道及

184 DNiii, 34. Dasuttara- Suttanta, p. 279, 10ff-11ff.

185 『長阿含十報法經』，CBETA, T1, no. 13, p. 235b7-8。

186 『長阿含經』，CBETA, T1, no. 13, p. 53c17-18。

187 『雜阿含經二十七經』，CBETA, T2, no. 101, p. 497a25。

188 『雜阿含經』661 經，CBETA, T2, no. 99, p. 84b11-12。

189 『阿毘達磨大毘婆沙論』，CBETA, T27, no. 1545, p. 904b9-12。

説」に該当すると判断できる。「道説調法定」の「道」は、「定・慧」二道の「道」を指す。

したがって、「法定」は、あらゆる三つの「無碍解」の慧を自由自在に体験できる。つまり、これは、「定」の力によるものである、という解釈は、妥当である。

また、「道説者、謂：説所從因縁得道。」の文の趣旨は、「説」の方に置くと伺える。つまり、その文は、前の三つの「無碍解」を説く能力がある、という意味を示す。

『佛説大安般守意經』『新出安般經』における「四解依」の文は、それぞれ〔A 段〕〔B 段〕〔C 段〕〔D 段〕〔E 段〕および〔I 段〕〔II 段〕〔III 段〕〔IV 段〕のように見分けられる。

『佛説大安般守意經』の〔A 段〕〔C 段〕は、ほぼ『新出安般經』の〔I 段〕の解釈にあたっている。

〔A 段〕の「法正」の解釈文である「㊦法正者謂道法」は、〔B 段〕に挿入されているため、㊦の文を取り除く〔B 段〕はまさに〔II 段〕を解釈する文ともいえよう。また、五陰を断つという趣旨に関しては、〔B 段〕と〔II 段〕との説明は極めて類似している。

また、前述した論説から見れば、〔D 段〕のキーワードである「所・本・正」は、「法無碍解・義無碍解・詞無碍解」を指すと考えられる。

上述の論究のまとめによると、『佛説大安般守意經』における「四解依」の文は、位置が前後に変動されているが、『新出安般經』における「四解依」の本文を解釈するものに相違ない。両經にある対応の箇所は次の如くである。

『佛說大安般守意經』	『新出安般經』
〔A 段〕從諦，念法，㉔意著法中，從諦，念法，㉕意著所念	〔I 段〕彼如應有諦，①從世間法行有亦②法世間著
是名為㉑1 法正	名為得③法解
〔B 段〕從諦，㉖本起㉑1 本著意	〔II 段〕彼如應有諦，④從本生，有亦⑤從本因緣著
〔D 段〕所本正	〔I 段〕所在〔II 段〕從本〔III 段〕從正
〔E 段〕見陰受	〔III 段〕如有⑦a 可見，若陰
〔E 段〕有入	〔III 段〕⑦b 若入
〔E 段〕正者	〔III 段〕⑦c 若從正

上述の『新出安般經』と対応する『佛說大安般守意經』の文と用語は本文であると考えられている，〔A 段〕の㉑「是便生是」および「生是當得是，不生是不得是」は安世高の訳語である。

## 小結

『佛說大安般守意經』における「四依解」の本文と註について。

『佛說大安般守意經』の「〔A 段〕從諦，念法，㉔意著法中，從諦，念法。㉕意著所念」「〔B 段〕從諦。㉖本起㉑1 本著意」、「〔D 段〕所本正」「〔E 段〕見陰受・有入・正者」は、本文の箇所である。

そして、それらの本文の箇所にたいして、「㉑是便生是，求生死得生死，求道得道，内外隨所起意，是為念法。㉔意著法中者，從四諦自知意，生是當得是，不生是不得是，便却意，畏不敢犯，所行所念常在道，是為意著法中也。」「㉖本起（本）著意者，謂：所向生死萬事，㉑1 皆本從意起，㉑2 便著意，便有五陰，所起意當斷，斷本，五陰便斷，有時自斷不念，意自起為罪，復不定在道為罪未盡故也。」「所在外為物，本為福，所在内總為三十七品經，行道非一時端故。言所本（正）者，謂：行三十七品經法，如次第隨行，意不入邪為正故。」「〔E 段〕……為受五陰。……為人五陰中，因有生死，㉑陰者為受正，……道自正，但當為自正心耳。」は、註の箇所である。

『新出安般經』における「四解依」の文は、四諦と四無碍解の両者にある関わりの陳述であり、『佛說大安般守意經』における「四依解」の文は、断片的で難解なものでありながらも、幾つかのキーワードによって『新出安般經』の「四解依」の文と対照して新たに考察すると、この段の文は『新出安般經』の「四解依」を解釈したものであると推定できる。

『佛說大安般守意經』と『新出安般經』の間には中間型『安般經』が確かに存在している。

## 六、結論

以上、「六事の淨」すなわち『三十七品經』における「五力」「七覺意」「八行」、ないし「止觀」「四諦」、および「四解依」それぞれの部分を検討した結果、『佛說大安般守意經』『新出安般經』「数息品」という三つのテキストの関わり合いについて再考察を試みてみると、三者は緊密した繋がりを持つことはいうまでもない。また、『新出安般經』の「止觀・四諦」および「譬如日出作四事」の文は『陰持入經』から引用され、そして再編成された文であるとも指摘したい。

また、『佛說大安般守意經』における「四依解」の文は、断片的で難解なものでありながらも、幾つかのキーワードによって『新出安般經』の「四解依」の文と対照して新たに考察すると、この段の文は『新出安般經』の「四解依」を解釈したものであると推定できる。

「四無碍解」（または「四無碍辯」とは法無碍解、義無碍解、詞無碍解及び辯無碍解のことで、その典拠に関して（一）法→義→詞→辯の順番と（二）義→法→詞→辯の順番との二種類がある。前者は毘曇（論）に属する類であり、後者は經に属する類である。しかし、南伝・パーリ語系の經・論には殆どは、（二）の類に属するものである。いつぼう、北伝・漢訳語系の經には前述した二種類とも見られるが、論には殆どは（一）法→義→詞→辯という順番を取るものである。『新出安般經』の「四解依」（すなわち四無碍解）とは、法解→利解→分別投解→辯才博解のことで、その用語と順番から、

北伝の論典、すなわち阿毘達磨に属するものと判断できる。

『佛説大安般守意經』における「四依解」の文は、断片的で難解なものでありながらも、幾つかのキーワードによって『新出安般經』の「四解依」の文と対照して新たに考察する。その結果、この段の文は『新出安般經』の「四解依」を解釈したものであると推定できる。結論として、この二つの經は大・小安般經の關係をもつ証拠になる。

## 【略語】

本論文では主要テキスト・参考文献の版本に関する略語の説明は次の通りである。

### 1. Original works published by The Pali Text Society (PTS)

（略語） （書名、訳者・編集者、出版等）

ANii= *Āṅguttara-nikāya*（増支部経典）, Vol. ii, 1888

ANv= *Āṅguttara-nikāya*（増支部経典）, Vol. v, 1999

DNii= *Dīgha-nikāya*（長部経典）, Vol. ii, 1982

DNiii= *Dīgha-nikāya*（長部経典）, Vol. iii, 1992

MN= *Majjhima-nikāya*（中部経典）, Vol. i, 1960

*Peṭakopadesa*= *Peṭakopadesa* (1982)

PSSB= 『*Peṭakopadesa*』の第六章「*Suttatthasamuccayabhūmi* 経義集の地」

SN= *Saṃyutta-nikāya*（相应部経典）, Vol. iii, 1989

The *Piṭaka-Disclosure* PTS, 1979

### 2. Periodicals, Serial Works and other Abbreviations

印仏研=印度學佛教學研究

PTS= The Pali Text Society, London.

T= 『大正藏』=大正新修大藏經（*Taishō Shinshu Daizōkyō*, Buddhist Tripiaka in Chinese）

⊕= 『金藏』=趙城金藏（1139-1173）

⊖= 『高麗藏』（1236-1250）

⊗= 『宮本』=宋・毘盧藏（1113-1172 又は 1104-1148，宮内庁書陵部所蔵本）

⊙= 『宋本』『元本』『明本』

⊚= 『宋本』=宋・資福藏（1239，増上寺所蔵本）

⊛= 『元本』=元・普寧藏（1277-1290 又は 1209-1286，増上寺所蔵本）

⊜= 『明本』=永樂北藏（1410-1440）

⊝= 『磧砂藏』（1231-1322 又は 1225-1350）

㊦=『南蔵』=大明南蔵(1412-1417, 山東省済南図書館所蔵本)

㊧=『嘉興蔵』=徑山蔵(1589-1676, 駒澤大学所蔵本)

「新発見の安世高訳『安般守意經』『仏説十二門經』『仏説解十二門經』金剛寺本」=『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究』(=落合俊典, 2004 =『報告書』) 中公開的寫本(影印) =『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究』(=落合俊典, 2004 =『報告書』) 中公開的寫本(影印)

㊨TEXT=「新発見の安世高訳『仏説十二門經』金剛寺本」写本(影印)

㊩TEXT=「新発見の安世高訳『仏説解十二門經』金剛寺本」写本(影印)

㊪TEXT=「新発見の安世高訳『安般守意經』金剛寺本」写本(影印) = 善本 = A 本

㊫=「新発見の安世高訳『安般守意經』金剛寺本」写本のB本(影印)

### 3. Database

CBETA= Chinese Electronic Tripitaka Collection, Version 2009.

## 引用文獻

### 佛教藏經或原典文獻

「中華電子佛典協會」(Chinese Buddhist Electronic Text Association, 簡稱 CBETA) 電子佛典系列(大正新脩大藏經第 1 冊至第 55 冊暨第 85 冊; 卍新纂續藏經第 1 冊至第 88 冊; 嘉興藏選輯; 正史佛教資料類編; 藏外佛教文獻 1-3 輯) 光碟 (2009)。

- 『長阿含經』。CBETA, T1, no. 1。
- 『長阿含經·十上經』。CBETA, T1, no. 1。
- 『長阿含十報法經』。CBETA, T1, no. 13。
- 『人本欲生經』。CBETA, T1, no. 14。
- 『本相猗致經』。CBETA, T1, no. 36。
- 『廣義法門經』。CBETA, T1, no. 97。
- 『普法義經』。CBETA, T1, no. 98。
- 『雜阿含經』。CBETA, T2, no. 99。
- 『雜阿含經二十七經』(=『雜阿含經』)。CBETA, T2, no. 101。
- 『增壹阿含經』。CBETA, T2, no. 125。
- 『七處三觀經』。CBETA, T2, no. 150A。
- 『佛說遺日摩尼寶經』。CBETA, T12, no. 350。
- 『佛說大安般守意經』。CBETA, T15, no. 602。
- 『陰持入經』。CBETA, T15, no. 603。
- 『修行道地經』。CBETA, T15, no. 606。
- 『道地經』。CBETA, T15, no. 607。
- 『法觀經』。CBETA, T15, no. 611。
- 『惟日雜難經』。CBETA, T17, no. 760。
- 『阿含口解十二因緣經』。CBETA, T25, no. 1508。
- 『阿毘達磨大毘婆沙論』。CBETA, T27, no. 1545。
- 『阿毘達磨俱舍論』。CBETA, T29, no. 1558。
- 『阿毘達磨俱舍釋論』。CBETA, T29, no. 1559。

『阿毘達磨順正理論』(=『順正理論』)。CBETA, T29, no. 1562。

### 中日文專書、論文或網路資源等

デアヌ フロリン (2004)。(=Deleanu, Florin)。「金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究」。東京：国際仏教学大学院大学。

楠山春樹 (1975)。「止観の研究」。東京：岩波書店。

釋果暉 (2008)。「『佛説大安般守意經』における「本文」と「註」の解明」。「法鼓佛學學報」3。頁 1-65。

釋果暉 (2009)。「『佛説大安般守意經』における「本文」と「註」の解明(二)」。「法鼓佛學學報」5。頁 1-57。

## 『佛說大安般守意經』之「經文」與「註」的解明(三)

### ——從「五力」到「四解依」

釋果暉

法鼓佛教學院助理教授

#### 摘要

從 1999 年在日本大阪府·天野山發現了所謂的金剛寺版《安般守意經》（=「新發現安般經」），經過了十年，其內容和《大正藏》第 602 號的《佛說大安般守意經》之關係，終於獲得解明。

筆者在第 3 期以及第 5 期的法鼓佛學學報中，對《佛說大安般守意經》與「新發現安般經」之內容以「安般之六事」為核心，逐一比對了兩經之「數」、「隨」、「止」、「觀」、「還」以及「淨」的「四意止」、「四意斷」、「四神足」、「五根」等各個段落之對應關係，而判別了「本文」與「註」。也就是《佛說大安般守意經》內容與「新發現安般經」的詞語或意義相對應的部份，視為《佛說大安般守意經》的原始本文，而其他非「本文」之部份則為「註解」。

本論文總括了「淨」的最後部份，也就是「五力」、「七覺意（七菩提分）」、「八行（八正道）」以及「止觀」、「四諦」、「四解依（四無礙辯）」等部份。以此比較研究，將《佛說大安般守意經》中各組的「經文」與「註解」一一判別出來。

研究之結果，我們發現了與《佛說大安般守意經》及「新發現安般經」最有密切關係的是：《修行道地經》的「數息品」及《陰持入經》。例如：《佛說大安般守意經》、「新發現安般經」及「數息品」都出現了對於「八正道」的特殊定義，而像這樣的定義是非常的少有的。又《佛說大安般守意經》、「新發現

安般經」及《陰持入經》中有「日出作四事」之比喻，而「數息品」中卻未出現。這證明了前兩經中的此一比喻是引用自《陰持入經》的。最後，我們也發現到在「新發現安般經」中有著「四解依（四無礙辯）」的完整段落，而《佛說大安般守意經》只保存著一些片斷，但透過嚴密的對照研究，確定了這些片斷就是用來解釋「新發現安般經」原文的。

**關鍵詞：**安世高、經與註、止觀、四諦、四解依

## **Distinguishing Text from Annotations in “*Foshou Da Anban Shouyi Jing* T602” (Part Three)**

Shi Guo-huei

Assistant Professor

Dharma Drum Buddhist College

### **Abstract**

In 1999, a new manuscript (Kongō Temple’s Manuscript) of *An ban shou yi jing* 安般守意經 (hereafter K-ASYJ) was discovered at Mt amino, located in Ōsaka Prefecture of Japan. After ten years, the relationship between its contents and the current Taishō Canon 大正大藏經 version, T602 *Fo shuo Da An ban shou yi jing* 佛說大安般守意經 (hereafter T-ASYJ) has finally been clarified.

In the third and fifth issues of Dharma Drum Buddhist Journal, I have compared the contents of T-ASYJ and K-ASYJ by focusing on “six stages of breathing.”

We compared the corresponding paragraphs of these two sutras and addressed the issues of “counting,” “following,” “fixing,” “contemplating,” “turning” and four parts of “purifying”—which are “Four Bases of Mindfulness,” “Four Efforts to enlightenment,” “Four Occult Powers,” and “Five Roots of Goodness.” After this, we were able to distinguish the “text” from the “annotation.” For example, we can treat the matching parts between T-ASYJ and K-ASYJ as the original text of T-ASYJ, and treat the rest—the parts that do not correspond—as “annotations.”

This paper continues to look into the other three parts of “purifying”—which are “Five Powers,” “Seven Factors of Enlightenment” and “Eightfold Holy Path.” Also, it looks into the parts of “Quiet and Insight,” “Four Noble Truths” and “Four abilities of unhindered understanding and expression.”

As an outcome of this study, we noticed that both of T-ASYJ and K-ASYJ has a close relationship with two other texts— “the Counting Breath Article 數息品” of T606 *Xiu xing dao di jing* 修行道地經 and T603 *Yin chiru jing* 陰持入經. For example, each text of T-ASYJ, K-ASYJ and “the Counting Breath Article” keeps a unique definition about “Noble Eightfold Path” and they are quite similar to one another respectively. This definition of “Noble Eightfold Path” is seldom found in the other texts. This proves that there is a unique relationship among these three texts. Both T-ASYJ and K-ASYJ have the simile of “to proffer four offerings after

sunrise 日出作四事,” this is very similar to the ones in “*Yinbiru jing*.” However, there is no such simile at all in “the Counting Breath Article,” so we can infer that it was quoted from “*Yinbiru jing*.”

Finally, the paragraph on “the four abilities of unhindered understanding and expression” was scattered around in T-ASYJ. Nonetheless, after our close analyses, we saw that they were just used for interpreting the part of “the four abilities of unhindered understanding and expression.” In K-ASYJ, there is a full paragraph on the four abilities of unhindered understanding and expression.”

**Keywords:** An Shigao; text and annotation; Quiet and Insight; Four Noble Truths; Sijieyi (four abilities of unhindered understanding and expression)